



春の風物詩・いさざ漁

### 昔ながらの漁が のどかに営まれて…

一年を通じて波おだやかな穴水湾は、四季折々に豊かな海の恵みをもたらす。春から夏へ、そして秋から冬へ、人々は海の物語によって季節の訪れを知る。

#### 【いさざ漁】

春3月、ようやくうらかな春陽が差すころになると、穴水湾の小又川河口などで、四ツ手網を使ったいさざ漁が始まる。いさざは体長5センチほどのハゼ科の小魚。小又川を流れる雪解け水がぬるみ始めると産卵のため海から遡上することから、「春の使者」とも称



暮らしを支える恵みの海

される。やや黄色みを帯びた半透明の魚体が網の上でピチピチ跳ねる様子は、いかにも春の訪れを告げる魚にふさわしい清々しさがある。漁が行われるのは、早朝から夕方まで。暖かい日には、網にいさざを追い込むための足場が地元の人々の歓談の場に変わることもある。のどかな春の一コマだ。

#### 【ボラ待ちやぐら】

「木を組み、日ぐらし魚を待つ」という字の通り、槽の上で辛抱強く魚を待つ伝統のボラ漁は、数年前まで5月の終わり頃から秋口まで行われてきた。

漁法はいたってシンプル。海に組んだ高さ8メートルほどのやぐらの上で、じっと海面に目を凝らして辛抱強くボラを待つ。やぐらの下には網が仕掛けられており、やがて魚の群が回遊してきたことを見定めると、いっきに網の口を締めて獲物を引き上げる。一見のんきそうなこの漁法、実は鋭いカ

ンと絶妙のタイミングが必要。発祥は江戸時代といわれ、最盛期には一日2000本もの漁獲があったという。今では観光用にわずかに2基が立つのみだが、穴水といえども先にあげられる町のシンボルだ。



ライトアップされたボラ待ちやぐら

#### 【かき漁】

七浦七入と呼ばれるリアス式海岸の入江は、絶好のかき養殖場。昭和初期、麦ヶ浦を中心に始められたかき養殖は年を追うごとに盛んになり、現在では日本有数のかき産地となった。

晩秋から春先にかけて、麦ヶ浦をはじめ、中居、志ヶ浦などの一帯は、おびただしいかき養殖筏からかきを引き上げるかき漁で賑わう。

いさざ漁師

中村眞佐子さん



鬼ごっこのような漁

「穴水には7つの川があり、いさざの漁師は現在、87人います。50年ほど前の全盛期には4000〜5000人もの漁師がいたそうです。私は20歳で働いてからときどき漁に出ていますが、本格的に始めたのは10年ほど前からです。漁は自然に大きくなるので、雨が降った次の日は川が濁ってこられません。あいの風や北風が吹く日は波にのっていさざが海からとんとん上がってきます。音に敏感ないさざを離れおどかし、網の中に追い込む。いさざの心理を読まなきゃいけない。子供のころやっただ鬼ごっこみたいなものです。県外から冷浦モのガキく手に入る今でも、地物のいさざは新鮮でおいしいと人気があります。昔ながらの習慣で、バケツを持って川に買いに来る人もいますよ」

自然と生きる

# 海の物語

“七浦七入”に抱かれて